第475号 昭和60年 1 月 20 日発行（毎月 20 日発行）
昭 和 49 年 8 月 31 日 第三種郵便物認可

年次晩餐会のフィナーレは皆で“ふるさと”を大合唱／撮影・羽田栄治

昭和五十九年度年次晩餐会

――新名誉会員に小原（勝）高山（忠）の両氏――

十二月一日（土）午後六時より、本年も恒例の日本山岳会年次晩餐会が盛大に開催された。

会場は既になじみになったホテルニューオータニ（千代田区紀尾井町4）の芙蓉の間で、今年は創立八十周年記念晩餐会が全国各地で行なわれている関係で出席が大幅に減少するものと予想されたが、その予想をうら切って出席会員数は三三六名に達し例年通りの盛り上がりをみせた。なお、このうち地方会員の出席が七六名にも達したことは例年にないものであった。

例によって晩餐会に先きだち午後四時三十分より、生憎くの小雨のため日本庭園の散策は駄目であったが、会場前室で簡易BARが開かれ、開会前より既になごやかな雰囲気がかもし出されていた。

晩餐会の司会は神崎忠男、大倉昌身両総務担当理事。

佐々保雄会長挨拶概要

まず例年に増して地方の会員に多く出席していただけたことは私が会長になって地方との交流を念じていたことの表われとして大変嬉しく思う。

会の現況は、会員番号の最も新しいもの九五八五番、実在籍会員数三九四四名、新入会員一四一名、なお、物故会員は一七名である。

本年度の名誉会員は小原勝郎、高山忠四朗の両氏。（紹介は別項参照）

八十周年記念行事のうち山行としては鹿野隊長のもとでのカンチェンジュンガの縦走、東海支部のガウリサンカール、学生部のボゴダ山地の四回目の派遣と、いずれも無事故での成功と輝かしい記録を残した。そのほか各種の記念行事が行なわれつつあるが、既に大阪と名古屋で盛んな記念晩餐会が行なわれた。募金については残念ながら予定にかなり足りないので、今後更に会員各位の努力を望みたい。

八十周年とは長い山登りの尾根に辿りついたに過ぎない。更に会員各位は次なる大きな山頂に向かって頑張っていただきたいと思う。

続いて大倉理事より物故者の名前が読み上げられ、全員で冥福を祈って黙祷が捧げられ、一分間の厳粛な時が流れた。

本年度の名誉会員は前述の小原勝郎（会員番号一三三四）、高山忠四朗（二七〇二）の両氏、永年会員は月原俊二（一四三六）、早川義郎（一五〇七）、山本敏三（一五二六）、村田数之亮（一五四九）の四氏。同じく大倉理事より名前が発表され、全員の祝福の拍手のうちに会長よりそれぞれ名誉会員

みんなで八十周年記念事業を成功させよう！

1985年（昭和60年）
1月号（No. 475）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目　次

昭和 59 年度年次晩餐会 ……（1）
創立八十周年記念晩餐会（名古屋）
中世古隆司 ……（2）
八十周年記念晩餐会（名古屋）に
出席して ……（3）
’84 年次晩餐会記念山行 ……（4）
東西南北 ……（4）～（6）
「上高地での DAV メルツ会長」他
第1回山の気象講座
科学研究委員会 ……（5）
追悼　片山全平氏 ……（6）
報告 ……（6）（7）
“図書交換会”“学生部マラソン大会”
図書紹介 ……（7）～（9）
「70 歳はまだ青春」「信州山岳百科」
「日本の名山」「生態調査のすすめ」
八十周年記念募金応募者ご芳名 ……（9）
会務報告・ルーム日誌・会員移動
（9）～（11）
お知らせ ……（11）
図書委員会，自然保護・海外委員会，
青年懇談会・学生部，科学研究委員
会，指導委員会，婦人懇談会

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせ電話 234六六五九

章と永年会員章が贈られた。

（小原新名誉会員挨拶要旨）

身にあまる光栄と思います。これからも一層、山岳会を大切にして、及ばずながら少しでもお役に立つよう努力したいと思いますのでよろしくお願い致します。

（高山新名誉会員挨拶要旨）

山国信濃の支部を代表していただいたものと有難く感謝致しております。今後とも会のためお役に立つことができるよう努めていきたいと思っています。

なお、永年会員四名のうち出席は早川氏のみで、その挨拶の要旨は次の通りであった。

好きでずっと山を歩いてそれで五十年たった。その間、会費をとどこおりなく納めたというご承認を得たようなものと、死ぬまで会に残れということだと思います。今年で八十八歳になりますが、これからも山登りを続けていくつもりですから今後ともよろしく願います。

続いて会長より本日出席の二三名の新入会員の名前が次々と読み上げられ一同起立、拍手のうちに新しい仲間として迎え入れられたのち、本会のために尽力していただいた元日本自転車振興会理事長の岡村武氏と一九八三年ポストモンスーンのアメリカのエベレスト西稜隊の隊長ジミー・サノご夫妻二組の来賓の紹介も合わせて行なわれた。

乾盃の音頭は最長老、本年八十九歳の辻荘一名誉会員。辻会員は在籍七十二年、ユーモアにあふれる前置きで高らかに杯を上げた。

式次第は一応ここで終わり、その後、待望の会食、懇談となりテーブルマスターの出番となった。テーブルマスターの制度もこれで四年目、すっかり定着し、各テーブルごとにその指示に従って、次々に運びこまれる中華料理、ビール、酒、ウイスキーなど口にしながら自己紹介、あるいは山の話しに花が咲いて、会場はなごやかな雰囲気の中にも一転して賑やかになった。

そしてそれがひと通り終わると司会の神崎理事の指示でテーブルを離れることが許され、友人、知人を求めて歩きまわる会員で会場は更に騒然となった。年次餐晩会で最も楽しいひとときを。

七時五十分、再び後半の式次第に移った。

（山田二郎副会長による八十周年記念行事報告要旨）

登山の部並びに記念晩餐会は前述の会長からの報告の通りそれぞれ成功裡に終了した。なお、今後の行事としては登山部門では京都大と同志社大学合同の日中友好登山隊が八五年ナムナニ峰（グルラマンダータ）に登る。記念晩餐会については八五年福岡（三月三日）、仙台（五月十一日）、長岡（六月十五日）、北海道（七月、日は未

日本山岳会創立八十周年
記念晩餐会（名古屋）

中世古　隆　司

信濃、山梨、静岡、岐阜、東海の五支部による八十周年記念晩餐会は、十一月十七日（土）、名古屋郵便貯金会館大広間にて開かれた。地元東海支部員はもとより、会長、両副会長、本部役員、関西支部長、役員の方々にも出席していただき、参加者目標一〇〇名を一名だけ欠けることの九九名の出席を得た。

午後四時からの第一部講演会は、東海支部若手のホープ水谷俊夫会員の司会で始まり、尾上東海支部長の挨拶の後、本年東海支部より派遣された二つの遠征の報告がスライドを交えて行なわれた。

最初は山岳会学生部主催（東海支部主管）の第四次ボゴダ峰遠征を大野紀和隊長より、西峰、中央峰、五一八〇㍍峰初縦走の報告があり、続いてガウリサンカール（南峰）南東稜初登攀と基地のベディン村におけるスポーツ、遊戯施設の建設、カトマンズでの日ネ両国の協力に関するシンポジウム等を行なった第二次日ネ国際親善隊の報告を、湯浅道男隊長、柳沢昭夫副隊長が行なった。両隊とも優れたチームワークが成功の大きな原因であったこと、仲間を大切にし、それぞれが持てる力を発揮するところに良い結果が生まれる、という考えが印象に残った。

午後六時、隣室に設けられた晩餐会場に移った。

創立百周年に向かっての抱負を述べられた佐々会長の挨拶に始まり、主催者側を代表して山本静岡支部長の歓迎挨拶の後、今西錦司先生に乾盃の音頭と近況についてお話を伺った。当初私どもの予定では、ほんの五分か十分程でも話していただけたら有難い、という気持であったが、先生には約三十分も話をしていただけた。司会の私としては、ちょっぴり時間も気になったが、話の内容はとても面白く、「自分は本部、岐阜支部、AACKの三者から名誉会員の称号をもらっているが、関西支部だけは何もくれよらん」と冒頭から愉快な話となり、探検の話、また最近は目ざす山の頂上まで車道がついていれば車を利用して登頂しても一向恥ずかしくないといった話など、とにかく先生の出席を得て大いに幸いであったというのが正直な感想である。

つづいて尾上東海支部長により、本日のメイン

記念晩餐会で挨拶する4支部長（左より尾上東海，松井岐阜，山本静岡，蒲生信濃の各支部長）

定）、富山（九月二十八日）と続いている。

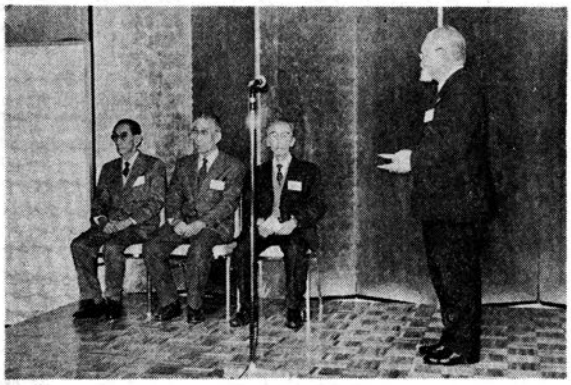
その他記念行事は中村評議員を中心に目下企画進行中である。

最後の募金についても十一月五日現在、一一六八名、（会員二九・二%）金額にして一五六四万円の応募をいただいているが、目標の二〇〇〇万円にはまだ若干不足気味であるので一層の協力をお願いしたい（締切りを年内一杯に延長）。各種行事の実行には予算を大幅に切りつめたため現情で充分まかなえているから、残りは基金の方に全額繰り込めるものと思う。

この報告が終ったあと、辻荘一名誉会員より、こういう場で皆で一斉に唄える歌「山をほめる歌」の作詩、作曲の応募の提案があって、満場の拍手で迎え入れられた。

恒例の北は北海道より南は熊本に至る全国十九支部の支部長、会員紹介、それに加えて東京近在の会員と、併せてこの会の準備委員の紹介にも割れるような拍手。

なお、ここで司会者によって物故者名薄に掲載もれとなった水野祥太郎、植村直己両会員に対して更めて冥福が祈られた。



写真左より小原（勝），高山（忠）各新名誉会員，早川永年会員

昭和五十九年度年次晩餐会のフィナーレは「ふるさと」。辻名誉会員の音頭、坂倉登喜子会員のリードで、全員席を立ち腕をにぎり合ってのわれるような大合唱。

「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川、夢は今も……」

（小倉　厚）

〔新名誉会員紹介〕

小原勝郎氏（一三三四番）

明治四十五年（一九一二）三月二十八日生。立教大学卒。昭和の初期より剣岳、五竜岳、白馬岳、鹿島槍、明神岳、穂高岳など日本アルプスの積雪期登山のパイオニヤのひとり。またその足跡は単に

テーブル着席者の紹介があり、その後、各テーブルマスター（東海支部委員）の司会でそれぞれ自己紹介をしながら歓談、食事に移った。

食事中、東海支部委員の池沼君の夫人で、ピヤニストの理絵さんが舞台で奏でるBGMが静かに流れていた。

宴もたけなわとなった頃、本日の特別企画、「尾崎喜八の詩と文章によるミニ・コンサート」を発表した。話はさかのぼるが、十月に行なわれた大阪の晩餐会に東海支部からも四名が参加した。大変素晴らしく、特に女性司会者が好評であったが、歓談の折、神崎常務理事から尾上東海支部長に何かアトラクション的なものがあればなお結構という提案があった。当初私どもによるオンチクワイヤをやろうかという意見も出たが、折角の晩餐会をぶち壊す危険も十分あるので、山岳会に応わしい何かないかと考えたのが、このコンサートである。

出演をお願いしたのは、朗読を名古屋青年劇団所属の間瀬晃さん、ソプラノ独唱を名古屋二期会で先程からピアノによるBGMを流していただいている池沼理絵さんの妹の神田美絵さん、ピアノ伴奏はそのままお姉さんという顔ぶれである。

シューベルトの弦楽四重奏のテープが流れる中、朗読が始まり、つづいて、文章の切れ目に、同じくシューベルトの「鱒」と「イム・アーベントロート」が歌われた。

当初、こうした酒のある席で、クラシック音楽をやるのはどうかな、とやや懸念されたが、さすが日本山岳会、静かに皆聴き入っていた。また朗読も独唱も素晴らしく、私は予想以上の出来に感動した。出席者の多数の方から称賛の言葉があり、晩餐会の雰囲気を大いに盛り上げた。

ひきつづき、安曇節をはじめ、いくつかの民謡も歌われ、楽しい時間が過ぎて行った。

最後に主催者側の山本静岡支部長、蒲生信濃支部長、松井岐阜支部長、尾上東海支部長の四人が壇上に立ち、それぞれ一言ずつ御礼の挨拶があり、午後八時四十分無事晩餐会を終了した。このあと場所をかえ、四十数名が二次会に出席、会長を囲んで夜遅くまで歓談した。

八十周年記念晩餐会（名古屋）に出席して

今回の晩餐会が、所謂従来のこの種の会合と異なっていたのは、「尾崎喜八の詩と文章によるミニ・コンサート」なるユニークな特別企画が催されたことであった。

詩と文章の朗読は名古屋の俳優兼演出家の間瀬晃氏、ソプラノ独唱は名古屋二期会所属の神田美絵氏、ピアノ伴奏はピアノ教師の池沼理絵氏等のプロによるコンサートで、内容は、尾崎喜八の「わが音楽の風光」の中の詩、朝のひとときという、山から帰ってきた次の朝、雪渓や岩壁、原始林や小鳥の囀り等、すべてがいまだ新鮮に保たれている山の記憶と、再び始まった都会の生活をないまぜて奏でる弦楽の調べ、という詩の朗読の伴奏に、シューベルトのクワルテット「死と乙女」が流された。本来なら同じシューベルトのクワルテット十四番を流すところ、レコードの持ち合せがないため、この十五番「死と乙女」を代用したとのこと、それにしても最初からひきずりこまれてしまう巧みな演出であった。

続いて、「山と音楽」の中の梓川の流れを描写した美しい文章で、イワナかカワヒメマスでも釣る人か、時々長い細い竹竿を持った人がそばを通ると、しぜんにシューベルトの「鱒」やその変奏

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

北アルプスのみにとどまらず、広く南アルプス、富士山など日本各地に及ぶほか戦前の台湾の山々にも足を伸ばしている。戦後の山歴としては本会の行事、第三次マナスル隊の先遣隊並びに本隊にも参加して活躍した。

昭和六年（一九三一）本会入会（紹介者は早川種三、槙有恒、藤島敏男の三氏）。昭和三十五～三十九年、四十三年、四十六～五十一年、五十六年より現在に至るまで評議員、昭和四十四～四十五年、五十四～五十五年監事として、多年にわたり本会役員として会務に尽した功績は大きい。永年会員は昭和五十六年（一九八一）。

高山忠四朗氏（二七〇二番）

明治三十四年（一九〇一）九月十四日長野県生。昭和六年（一九三一）三月農業学校を卒業後上京、辻村伊助氏のヨーロッパ・アルプスの文献に感激、その頃より山登りを始めたので、国内の主要な山はすべて登っている。

本会への入会は昭和二十二年（一九四七）六月。昭和二十七～四十二年信濃支部長、昭和三十～四十二年評議員。このように極めて長期にわたって本会の会務に貢献したほか、本会の大きな行事のひとつウェストン祭を十数年の永きにわたってプロモート、更に上高地山研の建設にも大いに尽力、その功績は極めて大きい。このため昭和四十八年十一月には、藤木九三氏に次いで、二人目の本会顧問となった。氏はそのほか日山協、長野県岳連の役員をはじめ、国立公園、自然保護などにもつくされ、多くの功労章に輝いている。

〔新永年会員紹介〕

本会には継続在籍五十年以上の会員に贈られる永年会員制度がある。本年は次の四氏がこれに該当し、年次晩餐会の席上、めでたく永年会員章が会長より授けられた。今後、会の長老としてますますのご活躍を期待するものである。

月原俊二氏（一四三六番）
明治三十九年十二月二日生
昭和八年四月入会
紹介者　角田吉夫　竹内亮

早川義郎氏（一五〇七番）
明治二十九年六月十五日生
慶応大学卒業
昭和九年二月入会
紹介者　藤島敏男　三田幸夫

山本敏三氏（一五二六番）
明治四十三年十一月七日生
大阪市立市岡商業学校卒業
昭和九年六月入会
紹介者　西岡一雄　津田周二

村田数之亮氏（一五四九番）
明治三十三年十一月三十日生
東京大学文学部卒業
昭和九年十一月入会
紹介者　茨木猪之吉

（写真・羽田栄治）

'84年次晩餐会記念山行

――丹沢山塊　大山にて実施

今年の晩餐会記念山行は丹沢の大山で、総務委員会主催のもと集会委員会、丹水会の応援を得て実施されました。

十二月二日（日）午前八時二十分に小田急線伊勢原駅に集合、バス、ケーブルを乗継いで阿夫利神社下社に集結し、ここで身仕度をととのえたあと、山頂を目指しました。雲一つない上天気で、柔らかい冬の日射しをあびて登り出したのですが、途中からガスが巻き始め、山頂では一時相当激しい雹にたたかれたのは寒冷前線の通過だったのでしょうか。そのため山頂では折角の景観も見ることができず、神崎委員のリードで天突体操で暖を取り、記念撮影ののち、不動尻を経て広沢寺温泉へ下山しました。そして温泉で汗を流したあと、大広間に集ってビールで山行の無事を祝って乾盃し、解散しました。今回の山行は地方からの会員方多数の参加を戴き、誠に有意義な集まりとなり、また参加総数も六十九名の多数となりました。

（入沢郁夫）

記念晩餐会（名古屋）

曲のピアノ・クインテットを思い出すという朗読のあと、ソプラノ独唱で「鱒」の有名な施律が歌われた。さらに、信州川上村梓山の深い秋、西の方、千曲川の下流、八ケ岳が遠く紫に染まって横たわる山峡に深紅に燃えて静かに沈んでゆく太陽をみて立ちすくむという印象的な文章の朗読のあと、シューベルトの「夕映えの中で」がソプラノ独唱で歌われた。

以上、三部の構成からなる、まさにミニ・コンサートの名の如く、ほんの短いひとときであったが、全く気のきいた心憎いばかりの演出で、参会者一同を心から賛嘆せしめるに充分であった。恐らく、この企画、演出は、当日司会をした中世古隆司氏によるものと思われるが、さらに六十年には、八十周年記念コンサートを名古屋フィルハーモニー交響楽団を動員して開催するとのこと、そのバイタリティーあふれる企画力、行動力にただただ感心するとともに、その実現に全会員こぞって応援したいものである。このような八十周年を記念しての行事を一つの契機として、全山岳会的規模において支部相互の交流が益々深まってゆくことに、大変有意義なものを感じる。この意味において、今後の各地区での八十周年記念の晩餐会を含めての各種行事を心から期待するものである。

（鈴木郭之）

東・西・南・北

上高地でのメルツDAV会長

昭和五十九年はUIAA総会がソウルで行なわれたため、十月十日のスイス山岳会々長に続いて十月十九日にはドイツ山岳会（DAV）会長のフリッツ・メルツ博士一行が本会を訪れた。メルツ博士夫妻、スポーツ用品店シュスター夫人、DAVフュッセン支部のショーバー夫人の四名で、十九日夜の本会主催歓迎会を済ませたあと、箱根、上高地、京都へと旅立たれ、それぞれの地域では、本会有志が一行を出迎えお世話した。

十月二十三日は上高地の山研に泊まってもらい、近辺を案内するという計画で、蒲生支部長など信

科学研究委員会報告

第一回山の気象講座

――昭和五十九年十一月八日（木）
日本山岳会ルーム――

講師　大井正一氏

講義の概要

(1)巻雲（すじぐも）の見方　分類法五種、四変種、一補助雲、氷晶からできている。雲の様子がばらばらなら好天、組織的なら悪天の前徴。

低気圧の前方に吹き出している時、日本海に攪乱が発生した時、組織的で悪天（同志社大の遭難）。組織的でも天候悪化しないときもある。ジェット気流に伴うもの。（多数のスライドで説明があった）

(2)教科書（新版気象学概論）による考察　大気の熱構造　地上から約一一キロメートルの高さまで対流圏、一〇〇メートルにつき〇・六五度の割合で気温減少、対流圏の上限（かなとこぐもの上面）は低緯度（例鹿児島）で一六キロメートル、中緯度（仙台）で一〇キロメートル、高緯度（稚内）で七キロメートルである。対流圏の上は、五〇キロメートルの高さまで成層圏。気温は上昇。

成層圏にはオゾン層があり、オゾンは太陽光中の紫外線を吸収し、生物を護るとともに地球の冷却を防ぐ。

放射　天気現象を起こすエネルギー源は太陽放射で、その波長は一ミリメートルの電波から一Å（オングストローム）のガンマ線に及んでいる。大気（窒素、酸素）、水蒸気、炭酸ガスは波長一〇―一三ミクロンの赤外線は吸収しない（窓領域）。

したがって人工衛星からこの領域の波長の赤外線写真で地球を写せば地球の海陸や巻雲からの赤外放射による写真がとれる。（新聞にのるひまわり画像）。一方、波長〇・八―〇・四ミクロンの可視光による衛星写真では太陽光の反謝により下層雲がとれる。この可視光の場合は当然ながら日中のみである。

散乱　可視光の散乱には二つの法則がある。窒素、酸素などの空気分子はレーリー散乱を行ない、空間の凡ての方向に波長の四乗に反比例した強さの光を送りだす。したがって可視光のうちでは波長の短い青色の散乱光が一番強く、空が青くみえるのはこのためである。

ジェット機上からは空は紫にみえる。紫は可視光のうち一番波長の短い光であるが、地上から空が紫色に見えないのは地上に達する前に紫の光が多く失われるためである。日没時など太陽高度が低くなると、太陽光が大気を通過する光路が長くなり、波長の長い緑、黄、赤などの光も散乱され、空が黄や赤に見える。

他方、過冷却水滴（大気中の水滴はマイナス三〇度くらいまで氷化しない）や塵埃はミー散乱を行ない、前方に波長にほぼ逆比例する強さの光を送りだす。このため雲は白く見える。

なお過冷却水滴からなる雲は輪郭がはっきりしている（積雲雄大）。氷晶化すると輪郭がぼやける（積乱雲）。

出席者　加治川栄二、中村小一郎、南川金一、重村清、長谷田英雄、原田衛、三栖寿生、深谷諭、榊原保志、林桂子、前野十行、大森弘一郎、斎藤かつら、松丸秀夫、小西至二、中村純二、高橋詢

（高橋　詢）

濃支部の役員が松本駅へ出向き、一行と昼食を共にしたあと市内を一巡し、上高地へと送った。

上高地では信濃支部の田中弘美副支部長と、前日、涸沢から山研に入っていた岡沢が、一行のお相手をすることになった。

食事や入浴は、会員の奥原宰君にお願いして西糸屋でしてもらうこととし、宿泊だけ山研にしてもらった。「会員たちはやはり食事を外でするのか？」とメルツ会長は不思議そうであったが、われわれの小屋は自分で食糧を持参するのが原則だと答えると、経営のむずかしいDAV山小屋での、経費節減の方法が見つかった、というような表情をしていた。

西糸屋で夕食をとっているとき、松本駅で一行を取材した新聞社から、上高地での印象をメルツ博士に聞いてみてくれと連絡があった。

"Ein sehr schönes, romantisches Tal! Es ist wie ein Tal in den Alpen, aber doch anders, schöner. Ich möchte hier, gerne länger bleiben und einige Berge besteigen. Schade, daß meine Zeit in Japan so kurz ist.（たいへんきれいな、ロマンチックな渓谷だ。アルプスにある渓谷のようだが、どこか違って、もっときれいだ。私はしばらくここに滞在したいし、いくつかの山に登ってみたい。日本に滞在する時間が短かすぎて残念だ）

メルツ博士は私のノートにこう書きつけてくれた。博士は、同行者のいないときはいつも一人で山へ行くとのことだった。

メルツ博士だけでなく、同行の女性たちも日本のことはよく調べてきたらしく、ハシの使い方も上手で、日本ソバなどはお代わりもしていた。日本の共同風呂に入るのも何か楽しそうだった。しかし、風呂の方は入る時刻が早くて、他に入浴しているものも少なかったらしく、湯が熱くて湯舟につかれなかったとボヤいていた。残念ながら、われわれはそこまで面倒をみられず、その場を想像し、田中君と私は思わず顔を見合わせてしまった。

河童橋にて（左端メルツ会長）

二日前まで風雨が激しく、山にはかなりの降雪があった

が、この日は高気圧が張り出して雲一つない快晴で、まっ白な穂高連峰、風に吹かれ降るように落ちてくるカラマツの枯葉、と一行はしばしば立ち止まりカメラのシャッターを何度も切っていた。

山研の電気コタツにあたりながら、歴史の古いシュスター家の話や、DAV事務局ににいる美人秘書の話など様ざまな話を聞かされた。

メルツ博士は五十七歳で、現職は弁護士。DAVの Vorsitzer（議長または座長）は二人いて、第一議長がメルツ博士、第二議長は私が先年、DAVを訪ねたときお目にかかったグラスラー博士。第一議長はDAVの収益部門で、会社組織になっているスキー・登山学校（校長はギュンターー・シュトルム）、それに青少年部門、自然保護護部門、養成部門、山小屋部門を統括し、第二議長は事務局（実務面は事務局長が担当）を統括し、任期は六年。メルツ博士の任期はあと二年だが、また六年やることになるだろうとのことだった。

二十五日午後、次の目的地、京都へ向け松本を発たれたが、この日の朝刊に自分たちのことが写真入りで報道されているのをみて、一行は満足そうであった。

なお、この一行の世話を身銭を切ってやった数名の会員に、メルツ会長は、用意してきたDAV在籍五十年会員用の記念メダルを与えていかれた。

ついでながら、この数日前、本会会員でもある涸沢小屋の主、奥原広次氏と話し合ったときのことを少し。

本会の会員が小屋を経営したり、その運営に関係しているところは、もう少し会員相互の理解のため利用して欲しいということです。

（岡沢祐吉）

第二十二回　木暮碑前祭

会報の予告にたった三行しか載らなかったので心配していたが、五十名の参加があったこと、五月の第三土曜日は、金山平ということが定着したのではないか。

さて、五月十九日、十六時から恒例の碑前祭。遠くは新潟の金山淳二さん。なつかしくも今井喜美子さん。霧の旅会からは、山崎金次郎さん、松本熊次郎さん、鶴岡元之助さん、野口末延さん。長野からは交野武一さん、小林啓助さんなどの顔が見えた。

山崎さんの、来年は果たしてお会いできるかという話は印象に残った。神原忠夫さんの「木暮先生をめぐる七不思議」来年もその続編のある由、たのしみである。

夜は、地元の堀口丈夫シェフの指揮の下、前田清子、小林基子、岡部みち子の諸姉、平井和雄、山本稔、篠原健夫、今井洋地の諸兄によって、豪華な山菜料理の数々がならべられた。名物「煮貝」は、故三井松男前支部長家からのさし入れであった。

あと有井館の心づくしの手うちそば百三十杯。二次会は前庭でたき火を囲みバーベキュー、スクラムを組んでの大合唱。

ちなみに酒量を記さば、清酒一斗三升、ワイン二升、ウイスキー一升、ビール二ダース。JACの健啖ぶりをみせた。

翌朝、金峰山組、瑞牆山組、遠く信州、経ケ岳組、本隊は、長駆御坂山塊に向かった。天気かんばしくなく、王岳の予定を変更し、鶯宿入沢の林道終点から鍵掛峠を経て、鬼ケ岳を往復、記念山行を終った。来年は、やはり御坂山塊前衛の釈迦ケ岳を予定している。ちなみに、最年少登頂者は、篠原岳史君五歳であった。

（山村正光）

二つの追悼集

折井健一会員と林和夫会員を追悼する本が、夫々非売品として遺族の方々の手により発行された。

「穂高渇仰　折井健一遺稿集」と「悪場を超えて　林和夫追悼」である。前者が未亡人の折井高子氏、後者は林電工株式会社である。

岩橋崇至写真展
『アルプス大縦走』

二月八日～十三日、10～19時
名古屋ワキタ・ギャラリー（電052―251―5221）地下鉄上前津
無料　東海支部後援

報告

第十七回　図書交換会

図書委員会

恒例の図書委員会主催による図書交換会が、約四十名の会員が参加して、十月二十七日（土）午後二時よりルームで開かれた。

当初心配した出品図書も、〆切りが近づくにつれて出品の申し込みが相次ぎ、結局、和書四三四点雑誌八八点、洋書一〇点とほぼ例年程度の出品点数となった。今回は洋書の出品点数が例年に比べ少

追悼

片山全平氏

（会員番号　三九九七番）

全平さんが亡くなられたと耳にしたとき、ちょっと信じられない気持ちだった。十一月三日、朝日新聞社の社内での死去だと聞いたが、やはりお酒がいけなかったようだ。十月二十五日、ルームで会報の編集委員会があり、全平さんも出席して、十月十八日に九十三歳で死去した詩人富田砕花氏のことを、だれか関西の人に頼んでくれるという話がまとまり、また最近の海外事情についていろいろと話題が多かった楽しい集りだった。

そのとき、後から大分お酒が出て、全平さんもかなり飲んでいたようだ。一時アルコール中毒気味で入院したりしていたが、その後すっかりよくなったということなので、それなら大丈夫だろうと思っていたのだが。

会としてもたいへん得難い人物で、運動部記者ではあったが、オフレコは完全に守ってくれて、仲間としておきあいできる人であった。著書はただ一冊「ヒマラヤ取材記」（昭和五十三年、スキージャーナル社）があるだけだが、朝日を定年でやめた後は、いろいろ書きたいものがあったことと思う。五十九歳といえば、人生はこれからという年令である。まことに心残りだが、これも運命なのであろう。

（山崎安治）

なかった。

主催者は例年、この行事に新顔の積極的な参加を呼びかけているが、今回はたまたま北海道からの参加者（横田春雄氏）があり、主催者一同を喜ばしてくれた。

今回の出品図書はとくに珍しいといえるものは少なかったが、それでも大部分の図書に複数の申し込みがあり、例年どおり当りくじを引き当てる抽選の方法によるものが多かった。抽選であるため、運のよい者は一発で引き当てたり、また逆に最後の残りくじに当りくじがあったり、その都度会場に大きなどよめきが起きていた。

申し込みの集中した本は、ジャン・フランコ著、近藤等訳『マカルー全員登頂』に十名、島田巽著『山・人・本』の署名入りに九名、京大学士山岳会編『アンナプルナ日記』の署名入りに八名などが目だった。入札本二点については、ジャベル著、尾崎喜八訳『一登山家の思い出』が底値九千円に対し一萬五千円で、また高頭式編『日本山嶽志』は底値三千円に対し一萬二千円でそれぞれ落札された。

今回の図書交換会の総売上額は、二八二、八〇〇円で、規定により一〇%ずつをそれぞれルームと図書委員会に寄附していただいた。また次の各氏からは図書のご出品のご協力をいただいた。あわせて厚くお礼申し上げます。

ご出品者名・敬称略

故成瀬岩雄氏ご遺族、国見利夫、鴫原啓佑、菅野弘章、島田巽、浅原重継、山崎安治、中村小一郎、千葉保之、滝川清、村松紀夫、岩瀬皓祐、橋爪幸達、松家晋、砂田定夫、三田幸夫、岡沢祐吉、平井吉夫、久保孝一郎

（千葉保之）

学生部マラソン大会

学生部

第二十一回学生部マラソン大会は曇り空の中、十一月十一日に行なわれた。昨年の台風十七号の風雨に比べればまずまずのコンディションといってよいだろう。二十校約百二十名の参加はひと昔を思うとやや寂しく、部員が少なく団体戦に出られない大学のことを思うと、やるせない気持になる。しかしながら勝負にかける意欲は昔と同様で、冬山に向けてトレーニングに励んでいる様子がうかがわれた。

さて結果は昨年まで団体戦十一連勝をしていた早大を上智大が破り、ひさびさに優勝トロフィーが早大の手から離れた。

男子団体戦（皇居一周　四名組　約二十キロメートル）

一位　上智大　一時間一二分二八秒
二位　明大　三位　早大A　四位　青山学院　五位　東農大　六位　学習院　七位　早大B　八位　東大　九位　一橋大　十位　駒沢大

女子団体戦（同）

一位　東農大　一時間三四分三〇秒
二位　共立女子大

男子個人戦（三周）

一位　大西　宏　明治大　五七分〇八秒
二位　鮎沢政文　一橋大
三位　長田　泉　上智大

女子個人戦（二周）

一位　馬場雅子　共立女子大　四四分三三秒
二位　江原淳子　青山学院
三位　山口和代　共立女子大

来年もより多くの参加を期待し山岳部根性で奮闘してもらいたいものである。また、各支部より代表校に参加していただき、交流を計りたいとも思っている。

最後に毎年この大会に賞品を供与下さっている次の各社に厚く御礼申し上げる次第です。

（順不同）

カモシカ、ICI、IBS、山幸、片桐、秀山荘、西武スポーツ館、茗渓堂、山と渓谷社、サンコージツ、日本用品、尾西食品

（村木富士）

図書紹介

七十歳はまだ青春

脇坂　順一著

「マッターホルンの登頂は、若い頃からの夢であった。かねてからこの山の写真を眺めるたびにその容姿に魅せられると同時に、いつの日にかぜひとも登頂してみたい思いに駆られていたのであった」（著書より）

著者が恋いこがれていたマッターホルン登頂へのチャンスが訪れたのが一九六一年八月、四十八歳のときで、学会出席を機に海外への登山がスタートする。

以来、マッターホルンを軸に二十年余に海外の山に登ること八十二座、五度目の還歴のマッターホルン、八十一年の中一日おいての七、八登。十登目の一九八三年八月は古稀を山頂で迎える。人生最高の日であったであろう。同年齢での同峰への登頂回数は日本人では初めてではないだろうか。

巻頭に登山活動の源泉となっている健康法を、著者は医師であるので、独特の食餌法、トレーニング法が、詳細に「山との出会いと私の健康法」の項で述べられている。

一九六一年の初めての海外登山から年次順に海外のみを一九八三

★ネパール研究ガイド

エベレストをはじめ、海抜八〇〇〇㍍級の"白き神々の座"など、その独特の文化に魅せられてネパールを訪れる日本人は年間一万人。初の本格的な文献目録『ネパール研究ガイド』（川喜田二郎監修、日本ネパール協会編、日外アソシエーツ発行、発売＝紀伊国屋書店。九、八〇〇円）が出版された。

日本で発行されたネパール関係の出版物四千点を十項目に分類しているが、特に自然、探検・紀行・トレッキング、登山の項は質量ともに充実している。

（朝日新聞'84・12・3 読書面）

ネパール研究ガイド
―解説と文献目録
A5判 480頁 9,800円

●お問合せ・資料請求は……
発行／日外アソシエーツ
東京都大田区大森北1-23-8 〒143
☎(03)763-5241

年までを取り上げ、まさにマッターホルン讃歌、健康讃歌である。コース及び時間記録もあり、ガイドブック的要素を含め非常に参考になる。

今後高齢化社会へと、日本は好むと好まざるとにかかわらず向かうが、健やかに老いることへの示唆ともなろう。ただし、著者と同水準の登山をするには並大抵でない努力が必要である。

一九八四年八月、また一つトルコのアララット登頂が加わった。まさに〝七十歳はまだ青春〟は著者のことを言うのだろう。

昭和五十九年一月二十日　山と渓谷社発行　二九九ページ　定価一二〇〇円　（稲永　篤）

信州山岳百科Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ

信濃毎日新聞社編

信州の山岳地帯における主要なピークをこまかに説明してある。第一巻が北アルプスで、後立山連峰、烏帽子・鷲羽連峰、槍・穂高連峰、常念山脈、里の山。第二巻が中央アルプスの北部、南部、南アルプス北部、南部、八ケ岳連峰、木曽の山、里の山。第三巻が戸隠、上信越高原、佐久の山、秩父山群、里の山と分けてある。

各ピークについてそれぞれの位置、山名の由来、コースの案内、測量登山からはじまる登山史がひとこと書かれてあり、日本の中部山岳地帯の山々がこれだけまとまって概説されてあるのは、この本が最初であろうし、それだけに一読の価値がある。「日本山名辞典」などは、スペースの関係で、この本に書かれているものよりずっと略されており、それだけにここに述べられている内容は読みごたえがある。

各巻の末尾にそえられている里の山の項は、あまり知られていない標高の低い山々について案内をかねて説明されてあって、本書を特色づけている。各巻とも山と動植物のカラー写真がたっぷり巻頭に飾られており、眺めてもたのしい。

昭和五十八年三月、七月、十二月　信濃毎日新聞社発行　各巻二六九ページ～二八〇ページ　総アート紙　定価各巻三九〇〇円。（山崎安治）

日本の名山　全十二巻

羽賀正太郎、近藤信行ほか編

「日本の名山」全十二巻が完結した。北海道から九州屋久島まで全国を十二の地域にわけ、主要なピーク千座について写真を中心に、エッセイ、案内、山のポイント、歴史など各方面からみたそれぞれの山の魅力がよくまとめられている。項目が盛りだくさんで、十分書きつくすことが出来なかったところもあると思われ、たとえば、私の担当した第八巻、剣岳遭難の歴史など、原稿用紙八枚ではとても書けるものではなかった。項目を減らしてももう少し奥行きのある記事がほしかった。しかし、日本の名山について、これだけまとめられてあるものは、恐らく初めてであろうし、とくに若い、山好きの人たちに一読をすすめたい。各巻は次のとおりである。

①大雪、日高と北海道②飯豊、朝日と東北③尾瀬、日光と南会津④谷川、妙高と上信越⑤富士、丹沢と関東⑥北岳、赤石と南ア⑦八ケ岳、御岳と中ア⑧剣、立山と北ア⑨槍、穂高と北ア⑩白山、大台と近畿⑪大山、石鎚と中国、四国⑫阿蘇、九重と九州。

昭和五十八年　五十九年　ぎょうせい発行　各巻B5版　一七六ページ　カラー口絵四〇ページ　定価二八〇〇円（山崎安治）

生態調査のすすめ

―ヒマラヤの人々の生活と自然―

沼田　真編

「山」四六二号一〇頁に、「千葉大東ネパール学術登山隊報告書」と題し沼田真教授の退官記念四部作の紹介をしたが、本来ならば本書も併せて五部作の形で出されることになっていた。このエッセイ集は、当初は「ヒマラヤの旅から―人々の生活と自然」と題し、古

実業之日本社　東京銀座1-3/振替東京1-326

車窓の山旅・中央線から見える山
山村正光・A5変型判・定価1900円
最新刊！
中央線新宿―松本間、同じ地点の同じ車窓から富士山、北岳、奥穂高が見えるのはどこ？130の山々への熱い思いをつづる異色随想。

御嶽の見える村
木曽開田高原日記
澤頭修自（序文・庄野英二）・四六判／1500円
最新刊！

好評既刊＊発売中

常念の見える町　安曇野抄
蜂谷　緑・四六判／1380円

山と別れる峠　串田孫一
・A5変型判　1600円

アルプス青春記　西丸震哉
朝比奈菊雄・A5変型判／1600円

山の博物誌　本多勝一
・A5変型判／1500円

山を考える
・四六判／1200円

今書院より、一九八三年五月頃に刊行される予定であったが、編集者の思いがけぬ病気のために遅れたとのことである。

本書は、編者沼田真氏の序文にもみられるように、沼田教授の定年退官記念を機に、この二十年間に千葉大学のヒマラヤ学術調査登山隊に関係した人々に、それぞれの立場から短い章を担当してもらい、一冊の本にまとめてみようと思った、そして十七名のいろいろな専門分野の人々に今まで公式報告書にはみられなかった面も拾いあげて執筆を依頼したとあるが、全般的にみると極めて質の高い内容である。

◎第Ⅰ部　ヒマラヤの自然（十編）
◎第Ⅱ部　人々の生活（十編）

第Ⅱ部の最後の四編をのぞき、いずれもネパール・ヒマラヤに関するものである。第Ⅰ部は沼田先生の専門である植物生態学調査に関するものを収録し、最後を沼田先生が「ネパールの自然保護」でしめくくっているが、第Ⅱ部の執筆者は、工学部の機械とか建築の出身者、農芸化学や歯学部出身者などが執筆している。しかし読んでみると第Ⅰ部とともに何の不自然さもなく生態学の本として読めるから不思議である。

沼田先生の序文によると、〝一九六三年の第一回学術登山隊を組織して以来、常にエコロジカル・エクスペディションを目指してきた。工学部の機械工学科を出た隊員であっても、その専門の素養を生かしつつ、風土に密着した農機具その他についての生態学的考察は可能であるに違いないと、きつい注文をした。建築学科出身の隊員にはキャラバンの道中、ぜひエコロジカルな条件と建築の様式なり材料なりとの関係を考察してほしいと、要望しつつ討論した〟。

このように登山隊員に対してもキャラバンの途中では全員に生態学的な観点に立った課題を課してきたようである。

生態学的調査は、誰にでもその気になればできるというのが沼田先生の持論である。

本書の題名が「生態調査のすすめ」とあるのはそのことをいいたかったからで、その意味でも、ヒマラヤにでかけようと思う者には大変参考になる。

なお、最後の二章、堀込静香氏のオンマニパドメフンと、中馬敏隆氏のスメル考―山名を考える一つの手立て―は生態学とは直接に関係はないが、大変に興味のある論説である。

A5版　二一四ページ　昭和五十九年十一月　古今書院刊　定価三二〇〇円

（松田雄一）

八十周年記念事業募金応募者ご芳名（昭和五十九年十二月五日まで、敬称略、順不同）

（二〇口）高山忠四朗（追加一〇口）（一二口）高田光政（追加六口）（一〇口）河野幾雄（追加六口）（六口）徳永篤司（追加五口）村田数之亮　（五口）三田幸夫（二口）加藤英彦　久米睦夫　早川英夫　後藤三郎　千石信夫　清水悟郎　稲垣信生　出口一良　滝川　清　松沢節夫　山田　格　大久保春美　松田孝一　斉藤賢二　乾　好　中沢　仁　（一口）岳蜂会代表白石田春治　下沢英二　望月計市　三ッ石清　広木孝一　伊丹一男　松林のり子　平野　彰　太田浩史　小川益男　篠崎　仁　山岸栄三郎　鈴木敏雄　井口拓夫　松田文人　野田憲一郎　滝口豊子　坂西徹朗

応募会員数累計　一二〇八名
応募口数累計　三二一六・一口
金額累計一六、〇八〇、六六三円

会務報告

十一月理事会

11月5日午後6時30分
場所　本会ルーム

出席者　佐々会長、田口、山田副会長、田村、大倉、西村、河村、松家、水野、平野、長谷川、絹川、村木、梅野、高遠各理事、松田監事、宮下、鴫原、中村各評議員

委任・欠席　神崎、赤松、鈴木、平井、皆川各理事、竹田監事、飯野、山口評議員

審議事項

○民家借用について
集会委員会より山岳会の施設として福島県の過疎地の民家を借りたい旨提案があり、検討の結果試験的に開設することで　了承

○成瀬氏蔵書購入について
洋書の一部七十二冊を百四十万円で図書基金より購入したい　了承

報告事項

○昭和五十九年度上半期収支報告
収支はほぼ予算通り推移している、なお監査の結果問題点はないが余剰金は資金運用出来る預金を考えること

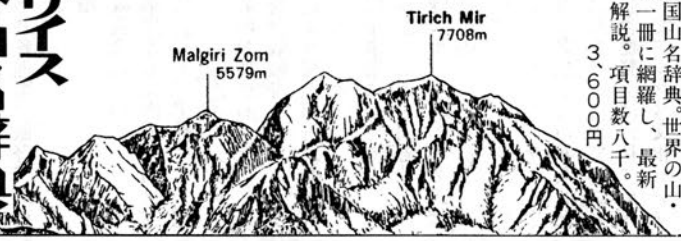
○八十周年記念事業について
集会分科会　大阪記念晩餐会は十月二十七日開催され百名の参加があった
募金分科会　募金状況応募者一一六八名（二九・二％）三、一二八口金額一五、六四〇、六六三円
登山分科会　ガウリサンカールは南峯登頂し無事帰国した
ボゴダについては年内にボゴダ登山経験者を集めて検討会を行なう
行事分科会　記念展については十一月中に交渉をつめる予定
NHKより「絵画で見る日本の登山史」開催の話がきている
その他各委員会報告が行なわれた

十二月理事会

12月3日午後6時30分

新発売
コンサイス外国山名辞典
●吉沢一郎監修／三省堂編修所編
十年の歳月と多数のアルピニストの協力を得て完成した、わが国初の外国山名辞典。世界の山・峠をこの一冊に網羅し、最新データで解説。項目数八千。
3、600円

世界の山々を手中に！



コンサイス日本山名辞典
●徳久球雄・三省堂編修所編
登山の山・文学の山・国を分ける峠など、日本のあらゆる山・峠を収録。この一冊で日本の山を踏破。項目数一万三千。2、800円
SSD 三省堂

場所　本会ルーム

出席者　佐々会長、山田副会長、神崎、大倉、西村、赤松、河村、松家、水野、平野、長谷川、絹川、村木、梅野、高遠各理事、松田、竹田各監事、宮下、鴨原、中村各評議員、岡沢理事代行

委任・欠席　田口副会長、田村、鈴木、平井各理事、飯野、山口各評議員

報告事項

○年次晩餐会について
三三六名出席し（内七六名は支部会員）、収支は予算通り。翌日行なわれた記念山行（大山）は六九名の参加があった

○支部長会議報告
各支部長より現況報告がなされた

○八十周年事業について
登山分科会　京大・同志社大合同登山隊（ナムナニ）の名義後援の依頼有り
集会分科会
来年アルパイン・コンサートを白馬八方で実施したいと東海支部より話しあり。富山でのブロック別記念晩餐会は九月二十八日（土）北アルプス文化センターに決定した

○その他
会員名簿を来年作成する予定であるが、広告を掲載して経費をおさえてゆきたい

○故佐藤久一朗会員の遺品（模先生の記念品）をいただいた

ルーム日誌

十一月

1日（木）海外委講演会
5日（月）理事会
6日（火）評議員会
8日（木）科学研究委
12日（月）図書委
15日（木）会員懇談会
16日（金）指導委
22日（木）会報編集委
27日（火）自然保護委
29日（木）山スキー道具講習会
30日（金）科学研究委

今月の来室者351名

会員移動

代表者変更

4851 朝日生命保険相互会社 山岳部 塚越 義信→西岡 雅彦

改名

5510 田村 聰明→義彦
9308 箕田 以住→藤江へ

支部事務局変更

信濃支部 松本市新橋3—21 田中弘美方（0263-32-1029）

退会

7705 矢部 哲雄
7560 池戸 誠二郎
8372 亀ケ森 健二
8466 佐藤 幸司

物故

1382 大間知邦太郎（2・）
4017 上村 篤（4・）
8211 角田 不二（7・）
3997 片山 全平（11・3）
933 岡田 喜一（11・6）
5624 宇佐美常樹（10・17）

その他各委員会報告が行なわれた

お知らせ

☎ 234-6659
この電話でもお知らせしています

◉ 第16回 山岳図書を語る夕べ

日時 昭和六十年二月二日（土）午後三時
場所 山岳会ルーム・集会室
講師 小谷隆一氏
演題 山書収集の楽しみ

小谷氏は登山家としても知名な方ですが、一方、山書の収集家としても類いまれな方です。

今回はこういった話を中心に語っていただきます。ご期待下さい。

図書委員会

＊

◉ 講演会

日時 昭和六十年二月七日（木）午後六時半～八時半
場所 日本山岳会ルーム
演題 アメリカの山と自然（スライド映写有）
講師 岡島成行氏 読売新聞社社会部

自然保護委員会
海外委員会 共催

＊

◉ アイスクライミング

日時 六十年二月九日（土）～十一日（月）
場所 松木沢
準備会 二月一日（金）十九時より

著名講師を招く予定です。くわしくはテレフォンサービス、準備会でお知らせします。申し込みは事務局まで

主催 青年懇談会・学生部

＊

◉ 山の気象講座

第四回は昭和六十年二月十四日（木）、第五回は三月十四日（木）、詳細は会報九月号に掲載してあります。途中よりの参加も歓迎。

科学研究委員会

＊

◉ 第22回「この一本展」開催についてお願い

二十二回を数えます恒例の「この一本展」を二月二日（土）日本山岳会ルーム図書室で開催致します。

今回は特にテーマを『RCC初期会員の著書とRCC報告及び資料』と定め、RCCメンバーの藤木九三、富田砕花、西岡一雄、水野祥太郎ら各氏の著書とRCC報告第一輯～第五輯並びに関連資料を展示する予定です。

つきましては右記各氏の著書を初め、RCC会員の著書、また現在ルーム図書室に架蔵していないRCC報告第一輯およびRCC関連資料（手紙、原稿、会規則等）をお持ちの方の出品をお願い致したいと思います。

右所蔵でご出品下さる方は一月末日までに図書委員会宛ご連絡下さいますようお願い致します。

図書委員会

＊

◉ 山岳スキー技術講習会

上越国境の巻機山周辺にて、山岳スキーおよびクロカンスキーによる技術講習をおこないます。

期日 四月十二日（金）～十四日（日）
場所 巻機山（一九六七メートル）周辺（盈進学園まきはた山荘泊）
参加費 一万五千円（宿泊費、食費、保険料等含む）
主任講師 小林政志会員
募集人員 三十名程度
申込締切 三月末日
申込先 山岳会事務局

指導委員会

＊

◉ 例会講演会

(1)三月七日(木) 吉田宏委員の「私の山登り、植村君のこと等」
(2)四月四日(木) 中村テル委員の「ニュージランドあれこれ」

いずれも18時30分よりルームで

海外委員会

＊

◉ セミナー「やさしい気象」

内容 天気図の見方（高層天気図も含む）と冬山、夏山への応用
講師 前野十行氏
日時 二月八日(金)、二月二十一日(木)、三月二十九日(金)の三回 十八時半 ルームにて
お問合せと申込みは婦人懇談会 梅野（〇四五—五八一—六七七〇）まで

婦人懇談会

昭和六十年一月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五—四 サンピュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 佐々保雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三—四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂